

主人公は宇宙人。

主人公は大学受験に落ちて、失意の中個人で星外旅行をしていた。

「世界なんて終わっちゃえ」

よくある思春期の絶望感。

主人公の乗る旅客シップが大気圏を離れた時、突如母星に巨大隕石が降り注ぐ。

母星は二つに割れ、地上との通信が途絶え、旅客シップは制御を失う。

大嫌いだったパパとママも、顔を覚えていないクラスメイトも、大好きだったアイドルも、全部全部死んでしまった。

そのことに気がついた時、主人公は震える手でコールドスリープ機能のボタンを押していた。

長い長い眠りの中で主人公は考える。

私はなんの為に生きてきたんだろう。

なんで生きることを(自殺ではなくコールドスリープを)選んだんだろう。

「私、まだ何もできてない。

何も持ってない」

受験に失敗した日の夢が何度も何度も繰り返される。

何度も試験問題を間違え、時間切れになり、合格発表の場で膝をつく。

ループの回数を数えるのも億劫になった試験前日の夜。

勉強机に座る主人公。

窓の外から声がする。

『誰か、そこにいますか？』

『こちらは地球です、誰かそこにいますか？』

主人公は返事をしたくてたまらなかった。

けれど、声が出ない。

『こちらは地球です。

あなたは一人じゃない。

必ずあなたを迎えにいきます』

主人公はペンを握りしめる。

私は一人じゃない。

夢よ、覚めろ。

その一心で主人公は勉強を頑張り、合格発表の日、ついに主人公の名前がボードに貼り出された。

輪廻を抜け出して主人公はコールドスリープから目を覚ます。

旅客シップが通信を受け取っていた。

『こちらは地球です。

誰か、そこにいますか？

応答願う』

『私達はあなたを探しています。

応答願う』

母星の言語と違うため、主人公にその言葉の意味はわからなかったが、主人公は必死にシグナルを返す。

誰かがいる。

誰かが私に通信を送っている。

ただ、その事実が嬉しくて。

地球と主人公は何度も言葉を交わす。

ペンを握りしめてメモをとり、主人公は少しずつ地球の言葉を覚えていく。

「私、ここに、いる」

拙い言葉の通信を送る。

旅客シップ前方の窓に青い星が映っていた。

曲の内容としてはここで終わりです。

後日談的なこと考えると、通信を送ってきた地球の人はUFO研究者みたいな人で、宇宙人を真面目に研究するなんてのは非常識なので周りから爪弾きにされていて、主人公と同じく孤独を抱えていて、それで通信元を辿ってUFO研究者の人のところに主人公が不時着して、なんやかんやで意気投合して、二人幸せに暮らしてほしいなとか思ったり。